

開扉の作法

開扉は「神が社へ入っては、この世が闇になる。」（理解Ⅲ 金光教祖御理解 10）の教えのもと、昭和58年の祭式制定の際に廃止された。

しかし、教会の御神前には御扉が現存しているところもあり、過去において開扉行事が行われていたことから、作法を文字化し保存のため、次にその所作を示す。

開扉は原則、祭主により奉仕する。

まず、自席を立ち、内殿手前で神前着座の作法で着座する。つまり、内殿手前で 止立、深揖、跪居と同時に内殿へ昇り、膝行、着座、一拝する。

（祭主が正中で段を昇る場合 体を少し上座へ向け止立、段を昇ると同時に跪居、正面に体を向ける）

次に、跪居になり、懐笏・懐扇し、覆面をし、叉手、膝行して御扉の所まで進み出る。

次に、左手を上、右手を下に左扉（祭主側）を開き、開くに従い、除々に体を自らの左方にかわしながら、体全体で押し開く。

次に、叉手して恭しく正中を通過し、右扉（副祭主側）へ移る。

次に、前と同様の作法にて、右手を上、左手を下にして右扉を開く。

次に、正面のやや傍ら（少し正中を避ける）に跪居になり、覆面をとる。

次に、着座、一拝、四拍手、一拝し、神前起座の作法で自席に戻る。

（注）

開扉の間、一同敬礼し、典礼は三声、警蹕をかける。

閉扉については、開扉に準じる。ただし、右扉（副祭主側）を閉じるときは、左手が上、右手が上となり、手は開扉の反対となる。

御扉の構造により作法に応用が生じる。たとえば、左扉（祭主側）を開く作法の前に、解錠する場合や、「拝み合わせ」の縦門がある場合は、それを外す場合がある。外したものは、下座（副祭主側）の適切な場所に納める。